平成１６年度福井県経済社会活性化戦略会議第４回会議概要

≪日　　時≫　　平成１７年3月２３日（水）　１２：３０～１５：００
≪会　　場≫　　福井県庁７階　特別会議室
≪出 席 者≫　　西川　一誠　　福井県知事
　　天谷　祥子　　学校法人天谷学園理事長
　　有馬　義一　　敦賀海陸運輸㈱取締役社長
　　稲山　幹夫　　稲山織物㈱代表取締役社長
　　加藤　秀雄　　福井県立大学経済学部教授
　　新町　光示　　㈱ジャルパック代表取締役会長
　　馬場　修一　　日本労働組合総連合会福井県連合会長
　　堀田　健介　　モルガン・スタンレージャパン・リミテッド会長
　　三田村俊文　　㈱福邦銀行取締役頭取
　　八木誠一郎　　フクビ化学工業㈱代表取締役社長
　　山本　雅俊　　福井県副知事
≪欠 席 者≫　　吉野　浩行　　本田技研工業㈱取締役相談役
　　吉村　豊子　　㈱吉村甘露堂取締役相談役

≪会議概要≫

〔事務局〕本日は、知事が遅れてまいりますので、あいさつは後程ということで、早速議題に入らせていただきます。それでは、三田村議長に議事進行をお願いします。

〔議　長〕本日は、平成１７年度予算を中心とした「挑戦（チャレンジ）ふくい」の対応状　　況と「ふくい２０３０年の姿」を議題として意見交換を行いたいと思います。

　では、早速、議題１の「挑戦（チャレンジ）ふくい」の対応状況のうち、平成１７年度当初予算における対応状況について、事務局から説明をお願いします。

［資料１、資料２］に基づき説明

〔議　長〕今までのところでご質問等ございましたらお願いします。

〔委　員〕経済社会活性化プランの１６年度予算額は１１０億円と言われたが、これは毎年度の単年度予算なのか。今年度の１３０億円には１部つながっているものがあるのか。継続事業にいくら新規事業をオンしたのか計算しないといけないのではないか。

　事業評価では、いくらつけたのかではなく、結果どのように使われたのかという説明が重要である。開業支援資金１３９億円とあるが、全部使ったのか。企業では決算見込みがないと予算がつけられない。

〔事務局〕現在、年度の途中であり、まだ最終的な決算額が出せない。

〔事務局〕開業支援資金については、１６年度に内容を増やして、ボリュームも上げた。今確認されているだけで、資金の申し込みが１７億円、実際貸したのが１５億円である。

〔委　員〕ネットで予算をいくらつけ、いくら消化したのかが重要である。

〔事務局〕今後、成果が分かるよう整理し、報告させていただきたいと思う。通常、融資を除くと予算措置額の９割以上が使われる。

〔委　員〕去年の活性化戦略会議で話が出たニュー・パブリック・マネジメントでは、使った結果がどうだったのかの分析が重要であり、税金を使ってやった成果を県民に判断していただく必要がある。

〔事務局〕県では予算査定の前に、新規事業については政策議論を行っている。その中で、事前にこのような指標でこのような成果が出るというのを、１件１件についてやらせていただいている。

〔議　長〕では、これ以上ご意見がないようですので、次に「今後の農林水産業活性化方策」に入ります。事務局から説明をお願いします。

［資料３］に基づき説明

〔議　長〕この件については、第２回と第３回の会議でご意見をいただいておりますので、今日は報告ということにさせていただきたいと思いますが、特にこの際、何かご発言があればお願いします。

ご意見がないようなので、次に『“ビジットふくい”推進計画」に入ります。事務局から説明をお願いします。

［資料４、資料５］に基づき説明

〔議　長〕この件については、第３回の会議で、「観光戦略プランの骨子」ということでご意見をいただいておりますが、何かご発言があればお願いします。

〔委　員〕先週、姫路駅に行ったとき、割と年配の男性と女性がボランティアで観光客の荷物運びをしているし、観光案内もしてくれた。もう１回行ってみたいと思った。福井駅も４月に新しく生まれ変わるので、小さくても親切で、心温まる福井となってほしい。福井に来る人よりも出る人が多いのでは困る。福井にまた行きたいと思わせることが重要である。姫路駅のボランティアは女性の心理をうまくついたもの。新幹線の開通も見越して、今から月２、３回来ていただくような取組みが重要である。

〔委　員〕観光プロデューサーはどのようなコンセプトで、どのような人を迎えるのか。

〔事務局〕観光誘客のプロとして知識のある人を選定したいと考えている。具体的には、福井の魅力を売り込める人、外に行って売り込みができる人を考えている。

〔委　員〕観光というと２つの面がある。１つは受ける側の体制、整備をどうするかという点。例えば、東尋坊をどうするとか、永平寺をどうするとかいった話である。だから売れるというものではなく、もう１つには売る方の体制もとらなければならない。実際に売るのは県ではなく、旅行会社であり、鉄道会社であるわけで、こういった会社が福井を売ることにインセンティブを持つようなものになっていかないと、数字につながっていかない。

これまで福井県に若干欠けていたものは、売る方に対するアプローチへ評価が低かったことである。例えば、「北陸」の旅行パンフレットなどを見ても、福井県の扱いが小さい。通過点として東尋坊や永平寺があるだけだ。北陸３県が同じウェイトでもって商品化するような努力をしてもらわないといけない。かなり即効的な効果が出てくると思う。

福井だけで売るのも限界があるので、北陸とか日本まんなかとかでやっていかなければならない。１つのブロックとして地域開発をしていく必要がある。

しかし、１年で実現するのは困難である。５年から１０年先を見据えての対策も必要もあ

る。その中で毎年、毎年、見直しを行いながらやっていくべきである。

〔委　員〕小松・上海定期便が就航したこともあり、敦賀市で観光ミッションを組んで、上海にＰＲに行った。しかし、中国ではビザがなかなか下りない。

　また、中国からの観光客は平均１５万円程度使うらしいが、観光ルートとしては東京やディズニーランドが中心で、日本のまんなかと言っても福井は全然知られていない。福井県からの進出企業の社員が、社員旅行で福井に来てもらうなどの働きかけも必要ではないか。そのためにもＰＲ活動は不可欠である。

〔議　長〕では、これ以上ご意見がないようなので、次に「最先端技術のメッカづくり基本指針」に入ります。事務局から説明をお願いします。

［資料６、資料７］に基づき説明

〔議　長〕この件につきましても、第３回の会議で「最先端技術のメッカづくり基本戦略」ということでご意見をいただいておりますが、何かご発言があればお願いします。

〔委　員〕基本指針にレーザー技術とあるが、若狭湾エネルギー研究センターでのレーザー研究とは異なるのか。

〔事務局〕それもあるが、ここでは民間でのレーザー加工技術を産学官連携でやっているものがすでに実用化されており、それをさらに高度利用していこうというものである。

〔委　員〕福井県で高度利用しているとなれば、関西などの企業に向けてのＰＲとなる。発信はどのようにしているのか。

〔事務局〕新年度にはいったら、それぞれの分野での研究会を立ち上げて、このような技術を活用するクラスターをつくっていきたい。

〔委　員〕このような技術をＰＲ、発信していけば、地元企業との交流も生まれるので、積極的に取り組んでほしい。原子力関連技術については、地元でもエネ研の成果についての話は聞くが、一般の人にはなかなか分からない。

〔事務局〕若狭湾エネルギー研究センターでの研究は、これまでも陽子線がん治療などには直接的な効果があったが、その他の分野については研究のための研究だとも言われてきた。そこで今回、中期計画を見直して、地元企業や県内産業界が求めている分野での研究をしていく方向で取り組んでいくこととした。これからはできるだけ地元に還元し、またエネルギー研究開発拠点化計画でも、地元に産業が根付くような方向で進めていこうと思う。

〔委　員〕県では、今回の基本指針をもとに、基本計画に発展させていくのか。

〔事務局〕産学官がベクトルを合わせるということで、１つの方向は確認しあった。今後、それぞれの研究については、産も学も業も官もこれに基づいてやっていくことになる。

〔委　員〕県と伊藤忠商事との先端技術分野での戦略提携は、県として何を目指しているのか。フューチャークラスターをみると、国が考えているような分野のような気がする。むしろ繊維や眼鏡などから発展するカレントクラスターの分野がもっとあるのではないか。

　セイコーエプソンという会社が奈良にあるが、インクジェットプリンターが９６年に飛躍的に伸びた。なぜかというとインクジェットノズルがレーザー技術でカットしていたのが、金型技術を生かしてなめらかにインクが出てくるようになったからである。

　福井の基幹産業である繊維や眼鏡にもそういった技術があるのではないか。そういうところをもっと掘り下げた地元密着型でやらないと、絵に描いた餅になりはしないか。

〔事務局〕伊藤忠商事との提携については、伊藤忠に産業支援センターでの認定企業のフォロー

や海外販路や海外との大学との連携をやっていただく。

フューチャークラスターまでいくには、事実相当の道のりがある。比較優位技術を発展させた形へ行くのが第１ステップで、それから上にフューチャーやドリームがある。

〔議　長〕では、これ以上ご意見がないようなので、次に「福井県知的財産活用プログラム」に入ります。事務局から説明をお願いします。

［資料８、資料９］に基づき説明

〔議　長〕この件につきましては、本日が初めてですが、何かご発言があればお願いします。

〔委　員〕国際特許の支援という話があったが、国内特許への支援の議論はなかったのか。ここでいう上位１２社で半分以上になっており意識がという話があったが、実は小規模企業にとって４０万円から６０万円というのは、特許の対価としては疑問符がつく。規模によってという議論があってしかるべきだ。

〔事務局〕この委員会では、国内特許については４０万円から６０万円の範囲内であるから、企業でやっていただくということだった。国内の１０倍以上になる国際特許については、企業にとってはかなりのものになる。福井県内に企業が国際特許をとっていない１つの原因になっていると考えたからである。

〔議　長〕では、これ以上ご意見がないようなので、議題１については終了します。引き続いて、議題２の「ふくい２０３０年の姿」に入ります。事務局から説明をお願いします。

［資料１０］に基づき説明

〔議　長〕ただいま「ふくい２０３０年の姿」ということで、概略の説明をいただきました。２５年先ということでなかなか難しい課題である。しかし、ある意味で大胆に想像することができるという気もする。

いろいろな見方で将来の姿が変わるだろうが、先ほど説明いただいたように、４つの章に分けております論点は大きく４つある。「福井の産業」の姿、「社会基盤」の姿、「家庭や地域社会」の姿、そして「求められる人間像」に大別される。どの項目からでも結構なので、ご経験を生かしてご意見をいただきたいと思います。

〔委　員〕２５年後の福井を支える人づくりが一番重要だと思う。団塊の世代が今、５０代後半、第２次ベビーブーム世代が３０代前半だと思うが、２０３０年頃には今の３０代の人がちょうど退職を迎える時期になる。次の後継者はどうなっているのかが重要である。現在、福井県の高校生の学力は全国でどのくらいにあるのか。

〔事務局〕これといった指標はないが、例えば大学入試センター試験の得点でいうと今年度が全国２０位であるが、英語、国語、数学の主要３教科でいえば全国９位である。

〔委　員〕割合高いですね。なぜそのような話をしたかというと、長野県は教育県でたいへん有名だった。雪国で、長い冬には勉強するしかなく、また議論好きであったことなどが理由だと思うが、今から１０数年前には、英語、数学、国語の３科目が下から全国で３番目に落ちてしまった。長野県から国立大学に現役で入る人数が、東京の戸山高校から現役で入る人数よりも少なかった。

福井県は、社長輩出率も日本一で、能力の高い県であると言えるが、今後の人と暮らしを考えれば、小学校から高校ぐらいまでの教育をどう考えていくかが重要である。２０３０年

の福井を支える力になっていくので、教育の部分について画期的な福井モデルの構築を期待している。

〔委　員〕２０３０年は遠い話でなかなか想像がつかないが、われわれが直面する、また取り組んでいくべき課題は非常に多い。そういうものを意識すればするほど、例えば、「『つくる』から『いかす』へ」と言われても、具体的にどうするのだろうかという気持ちになる。つまり、夢物語としての、絵としての将来を語ることはできるのだが、絵にかいたものと現実解決しなければならないものとは違うような気がする。福井が産業、あるいは製造業を機軸に今後ともやっていくのであれば、これを意識した将来を描かなければならないのではないか。

〔委　員〕福井に住み、福井に誇りを持てるようなまちづくりをしていかなければならない。ちょうど２５年前には、私は学生としてアメリカにいた。その頃は「国際化」という言葉がはやり、私自身も日本人の心を捨てて、アメリカ人に近づこうとしていた時期であった。「国際化」と言っても機軸は日本にあるが、今日のような「グローバライゼーション」となると地球という規模になるので、それぞれのエリア、国、地域というものを尊重するようにならなければならない。

　また、これからは個人にとっても企業にとっても、「導線」をいかにつくるかが重要になってくる。例えば、芦原にはいい温泉がある、三国には美しい海がある。しかし、そこに導線ができなければ、「団体」から「個」に移っていく時代に、個人のお客に満足感は提供できない。人よりもちょっと贅沢するとか、人よりもちょっと優遇されているといったようなところに満足感が生まれるので、どのような「導線」を描くか、１つ１つをつなげる何かを今から考えていかなければ、満足感どころか現状への不満にぶちあたってしまう。

〔委　員〕「ふくい２０３０年の姿」検討会というのは、どのような会なのか。

〔事務局〕県庁内の２０代から４０代、平均３０代中盤の若手の職員１６人でつくった検討会である。

〔委　員〕今、２０歳の若者ばかりを集めて２０３０年の姿を語らせるのと、４０代、６０代の人が語るのとは、それぞれ違ってくる。いろいろな世代の人と話されるといいのではないか。実は、ある女子大で、２１世紀は「女性の世紀」であるが、２０５０年には７０歳に近づく。そこに向けてどう生きるか重要だという話をした。２０３０年というとわずか２５年後だから、労働力として大きな力を発揮している今の２０代、３０代の人たちがどのように考えているのかが重要だと思う。

〔委　員〕報告書案は、現状を反映してか、諦めきったような感じがしてならない。どうも元気がない。悟りきったような気持ちでものを考えて、判断しているような感じがする。少子高齢化の中、福井でもっと子どもをつくろうとか、子どもをつくるためには補助金を出したらいいとか、子育てには福井は都会よりもずっと環境がいいとか、何か書けないのか。

　産業の部分でも、日本そのものが資源のない中で、資源を輸入、加工して、製品を輸出し、外貨を稼ぐような構造を習ってきたが、これに代わるようなビジネスモデルを作っていかないと、食べていけなくなる。前向きに収入を得ていく方法を考えていかなければならない。

　高齢化で７５歳まで経験を活かせる社会では、みんなボランティアでやってもらえば問題ないが、働けるから働く場所がほしいということになる。しかし、このままでいけば雇用の受け皿となる製造業がどんどん小さくなって、雇用がなくなってしまう。新しい用途開発とか、新しい市場開発を産業戦略でやっていく必要がある。

　教育のところでは、小さな県の割には教育が充実していたと考えるが、ゆとり教育のもとで、国際的にも日本の学力が低下している。こうした事態を踏まえて、福井県としていろい

ろな手を打っているのだが、２０３０年の姿では福井県の学力を上げるというところを取り入れるべきだと考える。

〔委　員〕女性の立場から、現状や人口減少・長寿社会の到来を考えると、女性が仕事をし、家事をし、子育てをするのは不可能だと思う。また、これからの時代は、人口を調節する時代になると思う。人口を調節していかないと、子どもを産み育てていけないからだ。そのために、福井県が率先して、例えば一定期間、子どもの面倒を見るような予算をつけていただかないと、子育ては無理なのではないか。このままの状態では、人口はますます減っていく。県の問題としてしっかり受けとめていただきたい。決して個人の問題にしてはいけないと思う。

〔委　員〕この報告書の内容は、すべてが間違いで、またすべてが正しいとも言えない。２５年後に自分たちの地域や環境、生き方がどうなるのかが、一番の視点になる。自然との調和の中でどう生活を営み、どう企業とタイアップしながら地域社会をつくり上げていくのかといった視点は、２５年後も今も変わらないと思う。

また、長寿を求めていくには、自然とのタイアップが不可欠だという点では、皆さんも異論がないと思う。その中で、どのようにして安心して家族を守り、育てていくのか。生活の糧を得るために企業とどうマッチしていくのか。その中で２５年後、どういう企業形態が望ましい形なのか。といった一連の流れの中で見ていく必要があると考える。

教育の面では、ゆとり教育の中で点数が１点、２点下がったという話があるが、単純に下がったから悪いとも言えないのではないか。点数が下がったからニートが増えてきたのかどうかわからない。人間教育や仕事に対する意欲、社会参画への学習を教育の中でどう位置づけられてくるのかといった問題もある。

最初の予算の話について、皆を１００％平等にみていくという考え方も必要だと思うが、活性化戦略会議の中では、福井県として今年は２００％、３００％の集中投資をして目玉商品をつくっていくといった策も一面であってもいいのかなと思う。こうして一部に火がつけば、また広がりも出てくるのではないか。

〔委　員〕今後は、グローバル化の時代を迎え、外国人との生活、共生が大きな問題である。

〔議　長〕今後は高齢化で元気な年寄りが増える。企業活動の中に高齢者を組み込んでいく必要も出てくる。また、元気な高齢者が一般の労働市場に参入せざるを得なくなるのではないか。県では、高齢者が若者と平等に働ける仕組みを、他県よりも早くつくるべきである。この点は、健康長寿を進めていく上でも行きつくところではないか。

それでは、予定していた議題も終えたので、第４回会議をこれで終了します。平成１６年度経済社会活性化戦略会議を終了するにあたり、皆様には、いろいろお世話になりました。

また、知事はじめ県の方には、委員の皆さんの建設的な意見を参考にして、必ずや立派な福井県をおつくりいただけるものと信じておりますので、今後ともよろしくお願いします。１年間、ありがとうございました。

〔事務局〕委員の皆様にはお忙しい中、貴重なお時間を割いていただき、誠にありがとうございました。以上で会議を閉会とさせていただきますが、閉会にあたりまして、西川知事からごあいさつを申し上げます。

〔知　事〕今年度最後の経済社会活性化戦略会議の閉会に当たり、ごあいさつを申し上げます。

委員の皆様方には、大変お忙しい中、一年間、会議へのご出席を賜り、また貴重なご意見をいただき、厚くお礼申し上げます。

私も、まもなく任期の折り返しを迎えます。福井が元気になるためには、産業が元気でなければなりません。また皆さんお一人おひとりに頑張っていただければなりません。これまで「挑戦（チャレンジ）ふくい」を中心に、この２年間、元気福井の実現に全力で取り組んできました。福井豪雨災害や原電美浜３号機の事故といった不測の出来事もございましたが、製造業などを中心とした景気の回復傾向、雇用環境の改善など、一定の成果が見え始めたと考えています。

会議の中で、「挑戦（チャレンジ）ふくい」を進めるための色々な計画やプランについてご説明しましたが、来年度は、成果をより大きく結実させるよう「実行・行動」しなければならない年と位置付けています。

財政状況の厳しい中ではありますが、平成１７年度予算に実効ある施策をできるだけ多く盛り込むとともに、副知事２人制、総合政策部の新設等の体制強化も図り、引き続き全力で取り組んでいきたいと思います。

本年度の会議はこれで最終となりますが、来年度も戦略会議を設置し、民間の視点から幅広いご意見をいただきたいと考えています。皆様の中から、再度委員をお願いする場合もあると思いますが、その際にはよろしくお願いします。

今後も、県政推進へのお力添えをお願いして、ごあいさつとします。ありがとうございました。

以　上